

和歌における空間の渦巻と他界への懸け橋

SPATIAL VORTEX AND BRIDGE TO THE OTHER WORLD IN WAKA

Lioudmila ERMAKOVA *

In Japanese poetry, be it *waka*, or modern poetry, place is always acquiring a special significance — this is a well-known fact. Of course, the poetry of other countries also considers place as an important category, but one can say that the history of *waka* is remarkable in this respect. In the period of transition from the folklore songs *kayo* to the phase of written literature the concept of place, which was always being thought the most important in the Japanese culture, was transmitted among the others, though this concept has naturally undergone some mutations. The *waka* of Nara and the beginning of Heian periods maintains in many respects a strong connection with the world of myth and ritual, and, to all probabilities, the formation of *waka*'s devices was influenced not only by the Chinese literature, but by the folklore songs, customs and ideas as well. And one such device which is directly connected with the notion of place and which

リュトミラ・エルマコーワ モスクワ国立大学付属東洋語大学卒。文学博士。現在は神戸市外国語大学教授。日本古代文学、神話学、比較文学。著書（単著、全てロシア語）「古事記 中巻」ロシア語訳・注釈と研究（シヤル出版社サント・ペテルブルグ、1995）「日本書紀」巻1-16、ロシア語訳・注釈と研究（ギベリオン出版社サント・ペテルブルグ、1997）他に論文等数十冊あり。

is, as far as I know, unique in the world literary history, is, of course, the so-called *uta-makura*. There have been quite a number of studies on *utamakura* in recent years that have tackled its structure and function, and I shall not consider this device here.

What I intend to focus on is the characteristics of space and place in *waka*. In mythical worlds, space is not homogenous. In a similar way, the spatial points that appear in *waka* are various. One of the concepts common to *waka* and, for instance, the ritual prayers *Norito* given in “*Engishiki*” (X century) is that of place as a point where communication between this world and that world is possible. Riverbanks, crossroads are places of a special sacred nature ; here a sort of spatial vortex is formed and one can communicate with the other world and has a chance to produce some effects on one’s own future. The borderline between this world and the other one is also full of supernatural powers. This paper explores how the way to handle these powers changed from magical devices to poetical devices, focusing mainly on the way space is classified in *waka*.

日本の詩歌では、和歌であれ、現代詩であれ、場所、所、地点が特別の意義を持っているということはよく知られている。勿論、他国の詩歌の文化においても場所は基本的なカテゴリーの一つであるが、和歌の歴史は場所が独自の意義をもつということを示している。歌謡の世界から文字化された“純粹”文学までの過程で、日本文化によっていつも大切に扱われていた“場所”と言う概念はたとえ機能が変わっても、伝承され続けて来た。周知のように、奈良時代と平安初期の和歌は多くの点で神話やいわゆる民間信仰との強い結び付きを保っており、和歌の代表的な手法も、中国文学の影響だけではなく、口頭で流通していた歌謡や仕来り、儀礼、信仰などを反映して来た。

場所に関わっている手段として、他国の文学に存在しないと思われる優れた

例は、勿論、歌枕である。歌枕というのは、地名を詩歌的な手法、枕詞として使う文学的なテクニックで、言わば、和歌全体を文章として呼び起こす方法である。歌枕に関して最近若干の新しい研究が現れて、その手法の構造と役割が大層深く分析されているので、ここでは詳しく扱わない。歌枕にかんし、最近多くの専門家が強調している点は、世界のポエトリーのなかで、ユニークな手段であり、おそらく、場所の魂、場所の神に訴える呪術の業であったということである。地名、あるいは、地名と一致する神名を称えて、この世を越える力を発揮させるのである。

和歌だけでなく、日本文化全体において、場所の特殊な役割は、古代から今まで保存されて来たといっても差し支えがないと思われる。場所にたいする日本人の態度は、外国人にとっては、日本文化の特別な、珍しい点のひとつであると言ってよいであろう。現代的な都会に住んでいる日本人であっても、方角の意識が強くて、例えば、道を教えたいと思う日本人は紙に道順を書く場合、普通、まず第一に北のマークをつける。未知の所へ行く日本人は、自分を正確に空間のなかで定位する必要性に促されて、できるだけ早く方角を知ろうとする。それは日常生活の細かい事実に過ぎないが、場所の概念を基礎としている哲学の理論も日本で生まれ、西田幾多郎氏の考え方の出発点となっている。

現代日本の哲学者、中村雄二郎は、『悪の哲学ノート』という本の中で、日本の歴史家、勝俣鎮夫氏の「家を焼く」という研究を基にして、次のように書いている。「中世には、犯罪に対する刑罰としてもっともポピュラーなものは、犯人の追放と犯人の住宅の焼却であった。たとえば、喧嘩が行われた場合、加害者だけでなく、被害者の家も、さらに、犯人がただ立ち寄っただけの家や、被害者が倒れ込んで死亡した家までも穢と見なしていたため、こうした処分の対象となった。言うまでもなく、集団から追い出したい対象は、犯人だけでなく、その家でもあり、と言うのは、場所そのものも全滅させようとしたからである。」

誇張を恐れずに言えば、空間次元の方がどこの文化においても時間次元に秀

でている。場所、空間の用語で、時間のあらゆる観念を標示するという、普遍的な現象である。日本古典文学の文章をこの点から見ると、例えば、『延喜式』の祝詞では、「現在も、将来も」という観念は、「今も、行く先も」と言う言葉で表されている。例えば、春日の祭の祝詞では、「かく仕へまつるによりて、今も去く前も、天皇が朝廷を平らけく安すらけく、足し御世の茂し御世に齋ひまつり、常磐に堅磐に副はへまつり……」

『万葉集』のなかの時間の複雑なイメージも区間において物質的なものの動きとして出ている。例えば、『万葉集』、山辺赤人、雑歌、No.324には、明日香の古い都まで通うという動作を、何回も、反復される動作として描くために、多数の枝を出す^{ツガ}樹をまきつく蔦に譬えている。「三諸の 神名備山に 五百枝刺し 繁じに生ひたる 梅の樹の 弥継ぎ嗣ぎに 玉葛 絶ゆる事無く ありつつも 止まず通はむ 明日香の 舊き京は……」。同じように、「これからずっと長い間」というイメージは、No.907に「……瀧の上の 御船の山に みず枝指ししじに生ひたる 梅の樹の 弥継嗣に 萬代に 如是しし知らさむ……」とある。

このようなイメージは、明確に時間と空間の統一と不可分を論証すると同時に、時間的な観念を空間的な手法とイメージが表していると言うことを例証していると思われる。

日本文化における場所の特別な役割は、ある学者の考えでは、太古に逆上って、神話に出てくる神の特色にかかわっている可能性が高い。それらのうち、有名な宗教学者、山折哲雄氏の興味深い考え方を簡単に述べておこう。山折氏によると、日本の多神教のタイプ的特徴というのは、日本の神々の過半数は、古代ギリシャの神話に登場する神々と違って、見えない存在であり、『古事記』や『日本書紀』に出てくる神には、名前がついているが、かならずしも肉体は具ってはいないということにある。もうひとつの重要な点は、日本の神々には、名前があっても、その名前は、神の輪郭をはっきりと伝えないということである。多くの場合、それは場所の名前である、というのは、神名は実際的には地

名であるからである。よく知られている通り、『延喜式』の祝詞における神、『続日本紀』の宣命における昔の天皇の名付け方は「一定の場所にいらっしゃる存在」として出てくる。この日本の神の面は、明らかであると思うので、そのようなケースにおける場所の大きな役割について詳しく話さない。

勿論、神の名前は、場所にかかわっていない場合もありうる。しかし、その場合も大部分は、その名前は、さまざまな理由で最終的に、場所の概念に変わる。神の名前は文化にとって地名、あるいは場所の記号に比べて、それほど重要な意味を持たないと思われる。例えば、伊勢大神宮の場合、天照大御神の宮は内宮、トヨウケノミコトは、外宮とよばれる。

神社の名前のつけかたに関して、山折氏はつぎのように述べている。「たとえば、春日大社は平安時代の昔から藤原氏の氏神として崇敬されていた。〈…〉その春日大社には五柱の神が祈られている（すなわち、タケミカヅチノミコト、フツヌシノミコト、アメノコヤネノミコト、ヒメガミ、オシクモネノミコト）。しかしわれわれはふつう、最初の四の神々を祈る社を始めから一宮、二宮、三宮、四宮と呼び、よく知られた第五番目の摂宮を若宮と呼び習わしてきた」。「伏見稲荷」の場合、社殿の背後の山上に鎮座するウカノミタマ、猿田彦とオオミヤノメの三柱の神の宮は、それぞれ、上宮、中宮、下宮と呼ばれる。

言い換えれば、神社に鎮座する神の名前は、地名ではない場合にも、空間における神社の位置、配置を指し、上／中／下、内／外その他の符号を使い、山折氏の言葉を借りて言うと、「一種の記号化の洗礼を受けることが多い」。このような記号は、今述べたように、大抵の場合には、場所と空間に結び付いている。そして、このような、目に見えない、肉体や決まった輪郭をもたない神の本質的な、不可欠の点は、一定の時間に（たとえば、儀礼の際）一定の場所に入っているという気配である。このような気配は特殊な意味をもつようになるので、日本の神の研究を気配の神学と山折氏は名付けている。

ある意味で、『万葉集』に出てくる「住ノ江の松」、「吉野の雪」、「立田の紅葉」等の文脈を、神の気配をつたえる合図と同じ構造をもつものとして考える

ことができる。勿論、この二つの現象は、元々結び付いていると言うつもりではない。けれども、両方はおなじような思考のパターンを踏まえて、発展して来たと言えるであろう。

前述の中村雄二郎の言葉、「場所の権力」、あるいは、「場所の支配」と言う言葉は、文学上、適用できると思われる。

さて、場所、空間にたいしての文学的思考は何だったかをもっと詳しく見て行きたい。まず第一に、考えられるのは、日本文学においては、一般的な概念としての空間より、場所の影響がより強い。日本文化の場合、空間は、主として、具体的な場所として形をとって、『万葉集』の和歌に体现された空間は、大体地理的な正確性をもっている。この地理的な和歌の面は、日本神話から受け継いだ特徴と考えられ、文学的なフィクションのなかへ神話風の確実性を持ち込むエネルギーとして取り扱われるであろう。

初めて文学的な文章に出て来る地名は『古事記』と『日本書紀』の国生みの神話であり、そのなかの地名の過半数は、男女という区別も付けることができる人間、あるいは生き物の気配を表している。と言うのは、例えば、ツクシの島は、『古事記』によると、身体がひとつだったが、面は四つ、その面の名前は、トヨヒワケ、タケヒワケ等で、津島の「亦の名」は、アメノサデヨルヒメ等で、『出雲風土記』の始めに出て来る記述には、出雲の国が、巨大な海の怪物に似ている。「国之大體、首震、尾坤」。

『万葉集』の世界では、場所と地名はその生き物らしさを失うが、その神聖的な力をずっと保っており、常設のアクセサリー、特別の符号を受け入れて、多くは歌詞の一種として機能している。

次に、以前から名前のない、無名な空間に移ろう。中国から借りた対句、天地は、今、時間の関係でとりあつかわない。人の住む宇宙の境と構造に関して考えたい。

『延喜式』の祝詞に書かれているように、人の世界、四方の国は、天照大御神がみはるかす（見晴らす）ところまでである。というのは、「天の壁立つ極

み、国の退き立つ限り、青雲のたなびく極み、白雲の墮りい向か伏す限り、青海の原は、竿柁干さず、船の艫の至り留まる極み、大海に船満ち續けて、陸より往く道は、荷の緒縛ひ堅めて、岩ね木ね履みさくみて、馬の爪の至り留まる限り、長道間なく立ち續けて……」

これをモデルとして、『万葉集』では、天皇は国見をする儀礼によって、土地を鎮めて、宇宙を作り直して、視力の呪術で土地に対する自分の権力を確かなものにする。この場合、天皇は、この世を越える、違う世界の存在として活動しており、山の峰は、二つの世界の境、特別な力をもつ場所となる。山の他に、この世と他界に同時に属している軸の場所は、坂（神話に出てくるヨモツヒラサカ、ウナサカ）、色々な交差点、あるいは、分れ道であった。『延喜式』の大祓えの祝詞には、罪と穢を追い出す所の一つについて次のように言われている。「荒鹽の鹽の八百道の、八鹽道の鹽會にますハヤアキツヒメといふ神もちかか呑みつつ」。そのような、空間のゾーンが交差する点で、その点に他界への通行ができる空間の渦巻きのような、特別な場所が出来上がる。

また、奈良時代と平安初期には、「あらびうとびもの」、つまり、病氣と災いの魔物を追い払う儀式は、京の四隅の道の上に行われた。神話と儀礼の世界から来るこの信仰は、形式と機能を変貌して、文学の観念となった。

たとえば、『万葉集』の和歌においても隅と隈という詞は特殊な役割を果たしている。今、略述して、隈の機能について考えて置きたい。

『万葉集』には隈という詞を含む和歌は、21首で、大多数の場合、道の隈、あるいは川の隈に、主人公が止まって、愛する人を思っている（25「隈も落ちず、思ひつつぞ来し」、79「川隈の八十隈落ちず 万段 顧みしつつ」などである）。そのすべての文脈を纏めて検討すると、隈というところが、人間の世界と他界を結ぶところであり、そこにいる歌詠みにとっては、別れた人、旅行に行った人、もしくは、死んだ人と奇跡的なコミュニケーションが可能で、その場所では、自分の愛情と悲しみを間違いなく、伝えられるので、また、そこで顧みれば、コミュニケーションの可能性そのものも、増大すると考えられる。

特に面白い実例は、坂と隈が、一つの詞として使われている和歌である。すなわち、『万葉集』427には「百足らず 八十隈坂に 手向けせば 過ぎにし人に 蓋し会わむかも」とある。二つの空間の境にあるゾーンとして隈が初めて出てくる例としては、恐らく、『日本書紀』の仁徳天皇紀、30年、歌謡の一首に、川隈に立っている木を別れた天皇と思う文脈がある。以上の理由によって、隈の概念も空間の特別な点として、呪術的な、超能力をもつ場所として取り扱うことができると思われる。

討議要旨

山口博氏は、ある場所が特別な意義を持っているというその場所について、単なる点、場所ではなく、「渦巻」また「懸け橋」という言葉を用いた理由を問われ、発表者からは、「渦巻」という語は、どちらの世界とも通行できる空間ということで、一種のメタファーとして用いたものだという答えがあった。山口氏からはさらに、「渦巻」がどのようにして他界へ懸け橋につながっていくのか、詳しい説明があるとよかったという指摘がなされた。

田淵句美子氏は、他界とコミュニケーションをする場としては、発表にあった「クマ」だけではなく、山、夢、ホトトギスの声などさまざまなものが考えられる。そういう全体を見渡したうえで論ずる必要があると指摘され、また「古代における」という限定をつけて考えた方が理解しやすいのではないかという意見を提出された。